

重点目標	具体的取組	実現状況の達成度判断基準	集計結果	分析（成果と課題）及び次年度の扱い（改善策等）
1 授業の規律を確立し、授業改善を進めて、基礎・基本の定着を図る。	① 教材や指導方法を工夫し、わかりやすい丁寧な授業を実施する。	授業改善に取り組み、授業の内容が理解 きる生徒の割合が A 90%以上である B 80%以上である C 70%以上である D 70%未満である	B	生徒授業評価の結果、「授業の目標や学習内容が理解できている」は前期80%、後期83%であった。前期の課題であった「考える時間や発言の機会を確保」についても、やや改善され、積極的に授業に参加している。 今後も、発問や考える時間を確保し、学習理解度を高める。
	② 考査期間中及び長期休業期間中に、成績不振者や欠席がちな生徒に学力補充を行い、基礎学力の定着に資する。	学力補充に参加した生徒の割合が、 A 95%以上である B 85%以上である C 75%以上である D 75%未満である	A	成績不振者や欠課の多い生徒を対象に、翌日の考査科目の学習を、個別対応で実施し、対象生徒の97%が参加し、生徒は真剣に取り組んでいた。冬季休業期間中も実施した。 今後も丁寧な指導で基礎学力の定着に向けて、継続していきたい。
学校関係者評価委員会の評価		授業に積極的に参加している生徒が増えている、いい状態であるので今後も継続してほしい。		
学校関係者評価委員会の評価を踏まえた今後の改善方策		生徒は先生方の姿勢を見ている、生徒は「僕らのために先生も頑張っているな」と思う。今後も努力を惜しまないで、生徒の実態に合わせた指導及び対応を期待している。		
2 キャリア教育を推進し、個々の進路実現を目指す。	① 本校教育振興会員と学校の繋がりを強め、就職・アルバイトの支援を依頼する。	教育振興会会員への連絡が A 年間5回以上である B 年間4回である C 年間3回である D 年間2回以下である	B	年4回会員への連絡を行い、5月と3月には「学校だより」を送付し、校内の活動をお知らせした。また、企業をまわり新規に3社会員になってもらった。アルバイト・就職支援依頼を行い、会員企業に卒業生が就職した。 総会の案内を出すのが45%は返信が無く、会費納入額も年々減少している。今後、その対策を考えなければならない。

	② 就業やインターンシップ等の体験を通して、勤労観・職業観を育み、進路選択の能力を高める。	就業体験や進路講話を通して、意識・能力が高まったと感じた生徒の割合が A 80%以上である B 65%以上である C 50%以上である D 50%未満である	B	アンケート調査の結果、体験を通して意識・能力の高まった生徒は65%であった。感想文から判断して、本校卒業生が行った進路講話を通して、意識が高まった生徒の割合は67%であった。未就業者対象のインターンシップは対象者がいなくて、今年度は実施できなかった。 進路選択に関して、意識が低かったり、自分に自信が持てない生徒が少なからずいる。次年度は、就業・インターンシップに関わる進路面談を通して体験を多く持たせ、意識および能力を高めて、進路実現につなげていきたい。
学校関係者評価委員会の評価		会費納入は今後厳しくなると思うが、創意工夫をこらしてもらいたい。 企業の開拓が必要であるのではないかと、努力してもらいたい。 昨年の反省から今年度は、卒業生の講話は生徒にもいい刺激になったのではないだろうか、来年度も継続してもらいたい。		
学校関係者評価委員会の評価を踏まえた今後の改善方策		今年度の様子を伝え、来年度の実態を紹介し、現状のアピールをする。また、会員の皆様に理解を求め会費納入を促してはどうか。 入学式や総会等の案内だけではなく、学校行事等の時に出席してもらえる工夫が必要に思える。 職員が足を運んで、一つでも多く企業を開拓していく。		

重点目標	具体的取組	実現状況の達成度判断基準		分析（成果と課題）及び次年度の扱い（改善策等）
3 学校生活全般を通して、コミュニケーション能力の向上を図る。	① 生徒会活動の活性化を通して、生徒間及び生徒・教員間の意思疎通の向上をはかる。	生徒会役員から生徒へのはたらきかけが、 A 毎月2回以上行われた。 B 毎月1回以上行われた。 C 年間6回以上行われた。 D 年間5回以下行われた。	B	生徒会役員は、アンケート等による生徒からの意見集約に積極的に取り組み、結果の周知にもよく努力した。また、各学年のホームルームに出向いて直接説明する機会も何度か設定した。ただ、回数は月一回のペースを維持するのが精一杯であった。次年度は、今年度の成果を踏まえつつ、一般の生徒のコミュニケーション能力向上の取り組みが必要である。
	② 教員自身の生徒理解能力とコミュニケーション能力を向上させ、生徒指導の円滑化をはかる。	対生徒コミュニケーション関連の校内研修を A 年間20回以上開催した。 B 年間12回以上開催した。 C 年間9回以上開催した。 D 年間8回以下開催した。	C	コミュニケーションに困難を抱える生徒を念頭に置いた授業研修や生徒理解・生徒指導上の校内研修を10回行った。回数が不十分だっただけでなく、教員自身のコミュニケーション能力向上のための内容が不足していた。 次年度は、教員自身のコミュニケーション能力向上のための研修を質・量ともに充実させる必要がある。

学校関係者評価委員会の評価		生徒会の役員を動かし学校の活性化を図ったのは、素晴らしいことである。 生徒の情報を職員間で共有する必要があると思う。		
学校関係者評価委員会の評価を踏まえた今後の改善方策		4月初旬に1年生や転編・編入学者のオリエンテーションによる、今後も継続して早く定時制になれさせ、安心して生活してもらうようする。 多くの時間帯を設け、教職員間の情報交換を行い共有する。		
4	基本的な生活習慣の確立に努め、心身の健康保持・増進を図る。	① 欠席・遅刻・早退を減らすために、生徒・保護者へのはたらきかけや、雇用主への協力依頼を工夫・徹底する。	前年度に比べて意識的に欠席・遅刻等を減らすことができた生徒の割合が A 95%以上である。 B 85%以上95%未満である。 C 75%以上85%未満である。 D 75%未満である	C 生徒の意識調査と出欠統計とを突き合わせた結果、意識的に欠席・遅刻等を減らすことができた生徒の割合は、年度末で76%であった。学年別では、1・2年生が全員改善したのに対して、3・4年生の数名が就業に絡む疲労や体調不良、家庭環境の変化、交友関係の変化等が原因となって著しく悪化した。次年度はよりいっそうきめの細かい生徒支援の検討が急務となる。
		② ストレスマネジメント教育の充実をはかり、ストレスへの対処能力の向上をめざす。	「学校へ行きたくないと思うことが少なくなった」と答える生徒の割合が、 A 80%以上である B 60%以上80%未満である C 40%以上60%未満である D 40%未満である	C 「以前に比べ学校へ行きたくないと思うことが少なくなった」と答えた生徒の割合は52%で、9月の60%より減少した。しかし、「城北高校は自分に合っているように感じていたか」と答えた生徒は徐々に増加し、今回は89%と多くの生徒が本校に居心地の良さは感じているようだ。ストレスマネジメント教育は次年度も継続する予定なので、アプローチの方向性を工夫し効果につなげたい。
学校関係者評価委員会の評価		仕事による遅刻は公欠にするなどの配慮すべきではないか。 生徒は良く努力し遅刻する生徒は少ない、達成度判断基準のハードルが高いのではないか。 アンケートの内容で、自由記述の項目があっても良いのではないか。 学校に行きたくなるような、環境を作るための努力を学校として粘り強く行ってもらいたい。 学校案内のポスターを市役所等に掲示し、地域社会の人たちが学び直そうとするきっかけになり、応募してくるようになればよい。		
学校関係者評価委員会の評価を踏まえた今後の改善方策		企業に学校の様子や実態を把握してもらうため、学校案内等を配布する。 生徒のアンケート内容で工夫が必要である。 地域社会への働きかけが必要であり、七尾市の広報等を利用することも考えていく。		